「嵐の中でも共におられる主」
マルコ４：３５-４１

平吹光太　２４.４.２１

本日は、イエス様と弟子達が舟に乗っておられる時に嵐に遭うが、イエス様がその嵐を静めるという箇所である。時に私達も人生の中で嵐のような苦しい経験をする。私達は嵐の中を通る時どのように生きたら良いのかを本日開かれています神のみことばから共に聞いていきたい。

「さてその日、夕方になって、イエスは弟子たちに「向こう岸へ渡ろう」と言われた。そこで弟子たちは群衆を後に残して、イエスを舟に乗せたままお連れした。ほかの舟も一緒に行った。すると、激しい突風が起こって波が舟の中にまで入り、舟は水でいっぱいになった。」（35-37）

「さてその日」（35）とは、４章１節のイエス様が舟に乗って群衆に神の国のたとえを教えられた時から同じ日のこと。そしてその日の夕方になり、イエス様は弟子達に「向こう岸へ渡ろう」と言われた。**「イエスを舟に乗せたままお連れした」（36）**とは、群衆に神の国のたとえを語り終えた後、すぐに舟で向かわれたということ。そしてイエス様と弟子達が舟に乗っていると突然大きな嵐が起こる。そこはイスラエルのガリラヤ湖で、世界一低い場所にある淡水湖。海抜 200m 程の低い盆地の場所で、ガリラヤ湖の北部には標高約 2,800m ある大きな山がある。そこから冷たい風がその低い盆地に向かって吹き付け、西から来る地中海の暖かな風と衝突し合い強風がガリラヤ湖の地域で時々起こる。本日の箇所でイエス様と弟子達がその嵐に遭遇。12 弟子のうち５人は漁師であったが、彼らが慌てて混乱する程の状況であったということはかなりの強風と高い波があったと分かる。舟にはイエス様と弟子達が一緒に乗っている時に嵐が起こっている。イエス様が弟子達だけを嵐の中に行かせたのではなくイエス様も共に嵐の中におられる。すなわち人生の中で嵐のような事は誰にでも起こるということ。私たちは嵐の中でどのように行動するべきなのかを考えたい。旧約聖書の中で嵐のような出来事がいくつもある。どの話も嵐は神と人との関係が回復される出来事。私たちが人生の中で嵐に遭う時は、神の御心を聞き、学ぶ良い機会、祝福の時。苦しみの只中にいる時は決してそうは思えない。けれども私たちはどのように神の前に行動するかを問われる。そこで本日の箇所から、嵐の中で私たちが神との関係を回復するため、良い関係を保つため、祝福されるために３つのポイントで見ていきたい。

１．　御声を聞く。

私たちはどんな時もまず神の御声に聞き従うことを忘れてはいけない。神の御声を聞いてはいるがいつの間にか自分の声に聞き行動してはいないか？36 節に弟子達の誤りがある。それは**「イエスは…『向こう岸へ渡ろう』と言われた」（35）**のに**「そこで弟子たちは」（36）**と主語が代わり、弟子達がイエスをお連れしたと書かれている。**「お連れした」（36）**の原語は「パラランバノー」。「パラ」とは「～の横から」という意味。つまり横から引っ張っていくという意味合いの言葉。すなわち、はじめにイエス様が行こうと言われたのに途中から弟子達が先導し

てしまった。私たちもいつの間にかイエス様の御声を横に置き、自分達の力（私たちが主語になり）で進んでしまう事がある。イエス様の御声を聞かずに行動するなら様々な雑音が入り惑わされる。舟が強風に吹き付けられ大きく揺さぶられ水が入るように私たちを攻撃してくる声がどこからか聞こえる。イエス様の御声を聞かずにいると私たちの存在価値、人格、神への信仰を揺さぶる雑音が心の中に入り込み溺れてしまいそうになる。そのため私たちが嵐の中でもするべきことは自分の声ではなくまず神の声を聞くこと。「**あなたのみことばは私の足のともしび私の道の光です。**」（詩篇 119:105）

時に私たちは人生の中で、嵐のような絶望的な状況で方向感覚をなくすようなことがある。または今その只中におられる方がここにおられるかもしれない。そのような時、神の御声、みことば、この聖書だけが、私たちに何が真理（正しい道）であるのかを教える。ですから私たちはいつも第一に神の御声に聞いて歩むことを選んでいきましょう。

２．神が良いお方であることを疑わない。

「ところがイエスは、船尾で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、『先生。私たちが死んでも、かまわないのですか』と言った。」（38）

ここで弟子達はある間違いをした。弟子達は嵐の中で不安になりイエス様を起こすまでは良かったがその後の言葉が問題。弟子達はイエス様に「海に投げ出され溺れて死にそうなので助けてください」と素直に言えば良かったが「**私たちが死んでも、かまわないのですか**」（38）と言った。これは神のあわれみ、助けを求めるのではなく自分達の状況を嘆いている。彼らは自分で自身を哀れに思う罪を犯した。私たちも同じ罪を犯してはいないか。苦しい状況にある時、自分は世界一惨めで神にも見捨てられていると思う。しかしそれは神が良いお方であることを否定すること。自分を惨めだと思っている人は、他の人や自分に注がれている神の愛、あわれみ、恵みの素晴らしさが分からない。なぜなら一番あわれみ深いのは神ではなく、自分だと思っているから。神も家族も友人も誰も私のことを理解せず救ってはくれないが、私は自分のことを一番理解していると。しかしそれは神が良いお方であることを否定していること。弟子達がイエス様に“私たちが死んでも、かまわないのですか”と言ったことは罪深いこと。なぜならイエス様は弟子達を、また全ての人を救うためにご自身の神としてのあり方を捨てて人となられたのに、「私が死んでも何とも思わないのですね」と言うことは、神の愛と十字架の御業を否定すること。私たちはどうか？嵐の中で自分自身をあわれむのではなく、「どうすることもできない弱い者です。主よ助けてください」と神のあわれみを素直に求めましょう。

３．神を畏れる

「イエスは起き上がって風を叱りつけ、湖に『黙れ、静まれ』と言われた。すると風はやみ、すっかり凪になった。イエスは彼らに言われた。『どうして怖がるのですか。まだ信仰がないのですか。』彼らは非常に恐れて、互いに言った。『風や湖までが言うことを聞くとは、いったいこの方はどなたなのだろうか。』」（39-41）

イエス様は起き上がり直接、風を叱りつけ、湖に黙れ、静まれと言われたのであり、神の名によって静まれとお祈りしたわけではない。これはイエス様が神である事実を現す。注目したい２つの言葉。一つはイエス様が言われた**「どうして怖がるのか」（40）**の怖がる（弟子達が嵐を見て怖がっていた）という言葉。これは原語ではデイロス＝臆病な、恐い。もう一つは**「彼ら**（弟子達）**は非常に恐れて」（41）**の恐れ（イエス様が嵐を静めて感じた感情）という言葉。これは原語ではフォボス＝恐れ、畏れ（神を敬う、身をつつしむ）、尊敬、敬意。この言葉は恐ろしいという意味と共に、自分よりもはるか上の存在に対する畏敬の気持ちを表す意味。この場面で起こったことは嵐の中で弟子達はデイロスの恐怖であったがイエス様が大自然の嵐に黙れ、静まれと言われた後はフォボスの畏れに変えられたということ。私たちも嵐の中で恐怖を感じる時があり、その恐れの原因を取り除こうとして恐れを避けて生きようとする。けれども、みことばはその恐怖を、神を畏れることによって克服する必要性を教えている。**「主を恐れる（畏れる）ことは知識の初め。」（箴言 1:7）**とあるが、神を畏れることは、私たちの全ての言葉や知識をみことばの下に置き、神のみことばを指針として生きること。さらに言うならば、みことばに示されている罪に自分自身が真剣に向き合い、その罪を避けて生きること。それが知識の初め、つまり私たちの人生の祝福の基である。

結：嵐の中を通る時、また今、ここに嵐の只中、絶望の中におられる方がおられるとしたら、まず何よりもイエス様があなたと同じ舟に乗っておられることを覚えて頂きたい。そして私たちが嵐の中を通る時、自分の声ではなく、まず、神の御声に聞き、また、自分を惨めに思うのではなく、素直に私を助けてくださいと主にあわれみを求め、そして、**「強くあれ。雄々しくあれ。彼らを恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主ご自身があなたとともに進まれるからだ。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」（申命記 31:6）**と約束してくださっている神を畏れて主からの平安を頂き、御心を求め、祝福された歩みをさせて頂きましょう。私たち一人ひとりを愛するが故に十字架にかかられたお方が、あなたを決して見捨てるようなことはありません。そのイエス様にどんな時も信頼し、より頼んで歩ませて頂きましょう。